

# 絶対自由の精神

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

『入出二門偈』の「彼の世界を観ずるに辺際なし」というところから話をしていきますけれども、この「彼の世界」というところに「仏法不思議」を見て、その仏法不思議とは「仏土不思議」というものであると言われている。そしてその仏土不思議の内容に、二つの不思議を挙げておられるわけです。この流れで、特に不思議ということが強調されています。

ところが、その不思議ということがどこから出てきたかという点、上の「一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり」という、その不可思議を承けておられる。そこからもう一回振り返ってみると、「観彼世界相」という以下は、他のところからもってきたのではなく、一心帰命する尽十方不可思議如来、その不可思議光如来を一心が観ずる。このように上を承けて展開している。そういう構造が非常に大事だと思えます。一心に尽十方不可思議光如来に帰命する。その尽十方不可思議光如来の不可思議の徳というものを、一心が観ずる。

「彼の世界を観ずる」と言う時に、形式的にいえば、そこに入出二門の要点が簡単に押さえてあるわけです。『浄土論』に帰ってみると、形式的には、初めの三行は序分ですし、「観彼世界相」というところから以下は、『願生偈』の本論になるわけです。世親菩薩自身の解釈によれば、そこでは浄土、仏土ということが問題である。それで『願生

偈」は、「浄土論」という題名になっているわけです。そうすると仏土というものを問題にしている。『浄土論』というものは、もとは『無量寿経』を承けている。『無量寿経』には、いろんなことが述べてあるのですけれども、結局は本願というものを説いたのです。名号を体として、名号にそなわっている本願の徳というものを、四十八願というものをもって説いた。それが『無量寿経』である。それを『浄土論』は承けている。その本願・名号というものの中心は何であるのかというと、そこに国土というものが中心になっている。こう言うのでしょうか。国土が中心になっている。我々は南無阿弥陀仏を通して、そこに本願の国土を見出す。この国土ということが仏教の大問題であるわけです。結局、仏道の問題というものは、もっと押さえていけば、国土の問題ということになる。こういうことなのでしょう。これは非常に大きな思想です。

信仰というようなことを言っても、信じると言っても、ただ気持ちが晴れるとか、そういうことではなしに、国土を見い出すということが大切です。信じるという者の眼を開いて、そこに国土を見い出す。そういう意義がある。ただ胸が明るくなったということではないのです。信心は、これはどこまでも一つの自覚ですから、自覚というものは各人各人の自覚です。けれども自覚を通して、そこに見い出される世界は、各人各人を超えているのです。国土というものは個人を超えている。あらゆる個人を包むからして国土という。そういう点が非常に大事なのです。つまり信心の自覚の眼を開いて、そこに国土を見い出す。そうすると国土というものは、信じた人間も信じていない人間も平等の世界なのです。国土というものからすると、信心を獲たとか、獲ないというような話はない。それは人間の世界の話であって、信じた人間も信じてない人間も平等です。信じてない人間も、いつかは信じるようになるのであるから、ちゃんとできている。別に早くに信じたとか、そういうことは自慢にならないわけです。あらゆる衆生がごとごとくその中に生まれてくるようなものをもってするのが国土です。国土というものは出来上がっているものではない。人類の流転の歴史を貫いて国土がある。そういう大きな世界を生み出していこうとするのが本願です。信じた者だけの

団体というような、そういうものではない。信じた、信じないということは、人間が考へるからそういう区別があるけれども、本願から考えれば区別はない。だから、信じたからといって威張るわけにはいかないし、信じられないからと悲観するには及ばない。こういうような世界です。そういう意味で、国土とは世界観ということ。信仰というものは一つの世界観を見出す。

曾我先生が「開神悦體」ということをよく言われます。「神を開く」という、この「神」というのは、Godという意味ではなしに、本当をいえば精神です。「神」というのは、キリスト教の聖書を漢訳した時の翻訳の言葉です。そういう事業をミッションというのですが、ミッションの事業というときにアメリカ系統のミッションとイギリス系統のミッションとがあつて、日本にいろんな翻訳ができたけれども、聖書の翻訳というものは、明治以後の翻訳では非常に傑作なのです。何であんなに立派な翻訳ができたかという、日本の翻訳の以前に漢訳が出来ていたからです。漢文に翻訳してあつた。その時いろいろな意見があり、ゴッドというのをどう翻訳するかという話になつて、今「神」という字になつているわけです。しかしもう一つ似たような言葉があつて、Gustです。英語でいうとSpiritという言葉で「霊」と訳します。むしろ「神」という字はそれに当てたほうがいいのではないか。「神」という字は精神のことをいふのであつて、Godはむしろ「神」というよりも、「天主」というほうが合うのではないかと思ひます。カトリックのことを天主教と言いますが、天主です。「開神悦體」という時の「神」という字は、これは精神を表すのです。精神を表すのに「神」という字を用いる。だから、「霊」と翻訳された概念、心靈を表すのに用いるわけです。人格的存在としての「神」は、むしろ「天主」というべきであらうと思ひます。キリスト教の天主というのは人格神をあらわします。これはキリスト教の神というものの特色なのですけれども、仏教でいう、「仏」という字や、「如来」という字は、人格的な存在というものを言うのではないのです。

確かに似ているようなこともあるけれども、仏教でいう阿弥陀仏というのは人格的存在者というような意味ではな

い。むしろ南無阿弥陀仏の徳を言っているのです。別にそんな人がいるというわけではない。我々の頭を押さえるような、そんな重苦しい阿弥陀仏はいないわけです。阿弥陀仏に救われるのではない。救われた人間が阿弥陀仏を拜む。阿弥陀仏というのは、救われた人にあるのであって、まだ救われない人にはない。阿弥陀仏とは救われた結果をいうのであって、阿弥陀様に救われるということはない。阿弥陀仏というのはいってみれば本願を建てたということです。阿弥陀仏の本願が建てられたことの意味は、阿弥陀仏が直接に衆生を救うということではないということです。しかし、その本願には国土という意味がある。その国土というものは、どこにでもあるのだけれども、またある意味から言うところにもない。どこでもあるけれどもどこにもない。つまり言ってみれば、国土というものは本来あるのだけれども、誰も気がついていないのです。本来あるのだからどこにでもある。しかし気がついていないから、そういう意味においては誰にもない。本来あるものの中にありながら、それに気がつかずにいるから、それを気づかせる方法があるわけです。それが念仏です。ですから本願といっても、念仏の本願です。念仏往生の本願。四十八願があるけれども、結局四十八の本願があるというわけではない。一つの本願。念仏往生の本願である。このように伝承されております。それは阿弥陀仏が衆生を直接救うということではなしに、念仏を通して救うということです。念仏を通して救う。直接に阿弥陀仏が手を出して救うと、そういうことはない。そうであるならば、それは奇蹟です。

キリスト教の信仰では、理屈ではわからないけれども信じるといいます。しかし仏教はそういうことは言いません。そこは非常にはつきりしています。だからキリスト教の信仰を奇蹟的信仰と言うなら、仏法は奇蹟ではない。その奇蹟的信仰と区別するために「不可思議」ということを言うのです。五つの不思議の中にも、奇蹟のような不思議もあります。そういう奇蹟のような不思議でない不思議である。そう仏法は教える。そういう意味で『入出二門偈』では、不思議ということが強調してあるのです。やはり仏教以外の宗教というのは、みんな奇蹟ではないか。多くの場合、靈驗あらたかということ掲げている。しかし仏教だけがそれを破っているのです。

阿弥陀仏というような、何か人格的存在というものがあって、我々がそれにすがるといふようなことではない。そういうものを普通我々は他力だと思ってるけれども、そういうものではない。こういうことをはっきりしたのはやはり蓮如上人という人があってのことでしょう。「すがるな」と言ってみたところで、人間はすがりたいものである。しかし、すがったのではこれはもう助からないし、「すがらない」と言ったのではなお助からない。それでは手掛かりがない。そういうことは親鸞聖人にはないことだけれども、これは蓮如上人の非常な御苦勞でしょう。教化ということです。

蓮如上人は、「阿弥陀ほとけの御袖にひしとすがりまいらするおもいをなして」と、こう『御文』に書いておられます。「すがるな」ということは言うておられません。そこが蓮如上人の御苦勞でしょう。「すがるな」といったら手掛かりがない。我々はどうしていいかわかりません。けれども「すがる」ということでは仏法にならないわけです。その辺の話になると面倒な話ですが、ただ「すがる」と言ってしまうと迷信になってしまいます。しかし「すがるな」というと縁がなくなるのです。「何でもいいからすがれ」というと、迷信になってしまふわけです。そこで蓮如上人は、本当にすがるものを与えたのです。南無阿弥陀仏、これにすがれと。これに全身全霊をかけてすがれと。つまり、すがっていいものを与えたのです。南無阿弥陀仏を与えずに、「すがれ」と言っても、人間は何をすがっていいかわからないのです。すがりたいなら南無阿弥陀仏にすがれと。「すがるな」とは言わない。「すがるな」ともいわないし、また単に「すがれ」とも言わないわけです。「これ」というものを出してすがらせた。それが蓮如上人です。やはり御開山の精神は蓮如上人のような人がいないと、在家の知恵も徳もない人間にはよくわかりません。そういう具合に非常に親切にしていたのだ。こう思うのです。だからして結局最後は、南無阿弥陀仏。そこにいけば御開山と同じです。だからして、南無阿弥陀仏にすがれと。南無阿弥陀仏にすがれば、すがった瞬間にすがるといふ心を超えるのです。

するが思いというのは一つの煩惱です。曇鸞大師が氷の上に火を焚くということを言われます。氷の上に火を焚いている。氷の上に火を燃やすと、それによって氷が溶ける。その溶けた水がその火を消してしまふ。つまり火によって火を消すのです。するが思いによつて、するが思いを超えさせるのです。するがのは煩惱かもしれないかもしれませんが、南無阿弥陀仏にすぎる。他のところに煩惱をおこしたら大変なわけです。南無阿弥陀仏以外のところに煩惱をおこしたらますます苦しいだけです。ところが、南無阿弥陀仏の上には、いくら煩惱をおこしても差し支えない。不断煩惱得涅槃。南無阿弥陀仏に我々は煩惱をおこすのだけれども、煩惱をおこさないというのは、これは考えてみても無理でしょう。しかも我々には煩惱をおこす場所がない。無駄に煩惱をおこしても仕方ないから、南無阿弥陀仏をちゃんと与えて、そこに煩惱をおこす。念仏は煩惱に負けるようなものではない。煩惱ぐらいにへこたれるような本願ではない。いくらでも煩惱をおこしてみよ。こういうものが南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏の中で煩惱を起せば、煩惱が転じて徳になってしまう。南無阿弥陀仏になつてしまふのです。煩惱が南無阿弥陀仏の内容になつてしまふのです。こういう一つの徳でしょう。煩惱は捨てて、そして功徳の宝を欲しがるというような、そういう情けない根性ではなくて、煩惱も功徳も平等だと、こういうような一つの大きな世界というものを開いてくるのです。信仰というのはそういう一つの世界観です。つまり世の中の見方がかわつてくる世界観です。これまでに見ていたような見方から、世界および人生の見方が全くかわつてくる。それを回心というのです。もの見方がかわつてくるのです。

天文学の話ですけれども、中世まで地球はじつとしていて太陽とか星とかとが動いている。こう考えていたのですが、ガリレイという一人の学者が出てきて逆ではないのかと考えた。太陽が動いているのではなく、地球がその周囲を動いている。このように逆に考えた。その後カントという人がでて、世界から人間が生まれるのではない。人間が世界をつくる。このように考えた。ある世界を人間が受け取るのではなく、かえつて人間の方が世界を作る。そのように、もの見方が逆になるということをコペルニクスの転換といいますが、本願というものもそういうものです。

念仏に立つと、ものの見方が逆になる。我々が踏みつけていたものが、ただかなければならないものになる。我々は本願を踏みつけている。本願に立っていることを忘れているものだから、何か助かるものを外へ求めていく。あっちへ行ったりこっちへ行ったりして、仏を外へ求めていく。しかしそれはとんでもない話です。脚下を見よ、自分の立っているところが本願ではないか、仏ではないか。こういうように、自分が踏みつけているような大地を、かえっていただかなければならなくなる。我々がご本尊の前で拝むということは、そういう気持ち象徴している。南無阿弥陀仏に立つならば煩惱をおこしてもいい。南無阿弥陀仏に立たないならば、煩惱をおこさなくても駄目なのです。立つか立たないか、その一点。それで世界が一転してくる。南無阿弥陀仏に立つと、そこに世界全体が浄土となる。どんな窮屈な世界にいても、広大無辺の世界というものになる。穢土としてはどんなに狭いところにおいても、ここに広大無辺の世界が見い出されてくる。世界観が開かれる。世界観と言っているのは、精神が開かれるということ。絶対自由の精神というものがそこに立ち上がってくる。

今現在の世界は、資本主義という世界です。窮屈な世界、現在の資本主義社会がそうです。しかしそれは共産主義社会に変えなくても、変わっていくのです。それは業道自然として変わっていく。永遠に変わらないというものではない。全て世の中の体制というものは、できたものですからまた滅するのです。作られたものはまた滅していくものです。資本主義社会でも封建社会でも、みな作ったものですから、それが変わっていくのは当たり前のことなのです。変わらせまいと思っても、その変わらせまいと思う動きの方が変えていくのです。なお一層ひどくなる。つまり、頑固な保守がかえって革命を促進するのです。そういうものは業道自然です。そういう場合の自然とは必然です。業としての必然なのです。そうせざるをえないという必然です。

そういうような意味で、その不可思議光という世界が一心に開かれてくるのです。これまでも言いましたけれども、帰命尽十方不可思議光如来というものは南無阿弥陀仏ということ。もう一つ別にあるわけではありません。南無

阿弥陀仏の他に尽十方不可思議光如来も尽十方無碍光如来もありはしません。たびたび言いましたけれども、『浄土論』では、中に入ると皆「阿弥陀」という字が使われていますけれども、一番初めのところにだけに「尽十方無碍光如来」という名前が翻訳してある。解釈してある。世親菩薩がそういうように解釈して、わざわざその解釈を通して、南無阿弥陀仏を掲げてある。その意味は、南無阿弥陀仏ということと同じことなのだけれども、わざわざ解釈されたというところに何か特別な意味がありそうですね。阿弥陀仏の他のことを何か言うのではなく、阿弥陀仏における非常に重要な意義をそこに注意された。

皆さんご存知のように、『大無量寿経』に十二光ということがあります。『正信偈』にも掲げてあります。阿弥陀という字が十二光の意味を持っているのだけれども、あまり多いというところからなくなってしまう。これもある、これもあるということでは、結局言わないのと同じことになる。そこで、阿弥陀ということの中で一番重要な点を押さえて、特に無碍ということ、これが大事である。阿弥陀ということは無碍という意義が中心である。こういうことを世親菩薩は注意された。無碍といっても、有碍の中に無碍がある。有碍というのは何かというと、これも面倒な話ですけれども、業繋ということを言いますから、業によって縛られているということなんです。その業の繋の中に無碍がある。つまり業道自然の中に絶対自由である。業道自然をはねのけて絶対自由ということを考えるのではない。

業道自然、これは必然でしょう。必然という言葉は、ドイツ語では *Notwendigkeit* というようなこともあるし、また *missen* という言葉もある。 *Notwendigkeit* という言葉には、昔から「そうしないことは許されない」という訳をつけています。つまり、そうせざるを得ないということ。そうせざるを得ないというような意味の必然です。 *Not* という言葉がだいたいそうです。難儀、困窮という意味があります。非常に苦しい、貧乏というような意味なのです。やむを得ずしなければならない。背に腹は代えられないというようなものですね。その場合には必然なのです。これは日本語でもそうかも知れないけれども、あんまりいい必然ではない。そうさせられるという必然です。つまり



有碍なのです。その中に自由だと。業道自然というようなことなしに、ただ絶対自由というようなことを叫んでみたところで、それは観念論です。縛られているのに自由だと言ってみたとこでもな話にはならない。それは禪を外しているようなものです。禪というものは、あると邪魔になる。しかしその禪を外してしまつて絶対自由だということを書いてみても、そうではない。禪はやはり縛るものでしょう。禪というものは、何か人間の恥ずかしい所を隠すということもあるけれども、それよりも私は横の帯の方が大事なのではないかと思ひます。例えば相撲取りのまわしは隠しているのではない。あれは横の帯が大事なのでしょう。それを捕まえられると相撲がとれない。だから越中禪ではいけない。紐が切れてしまいますから、相撲がとれない。帯をしめるところが一つ大事なことでないかと思ひます。体を一つ縛る。それで相撲が自由自在にあたれるわけでしょう。縛らずに自由にあたるということはない。縛られることにおいて、かえつて絶対自由のはたらしを生ま出してくるのです。有碍の中の無碍というのは、そういう意味です。縛られずに自由と、ただ言っているのは、子どもみたいなものでしょう。

やはり信仰というものは、自分が何か縛られるようなところに立つということが非常に大事なのです。それは人間として信仰以前の問題です。そうすると、その立つたところが信仰を要求するのです。信仰は別に天から降ってくるものではない。要求するものです。だから願というものが信仰のもとになるのです。つまり隠居みために、もうわしは自由だということになると、信仰に要求をしないのです。だから隠居していくら佛法を聞いてみたところで、それは暇なのだから意味がないのです。ところが、もうどうにも出来ないようなギリギリのところを立て生きていけば、それに堪え得る信仰を要求する。昨日新聞に出ていましたが、東本願寺で坊さんと門徒が集まつて協議を開いた。あそこでは嶺藤総長が頑張っています。嶺藤君は私の知り合いです、ああいう生きるか死ぬかというところに身を置いてる。つまり分水嶺です。曾我先生で言えば、絶体絶命で分水嶺に立っている。そういうところろに身を置くと、その絶体絶命に堪え得るような信仰を要求する。分水嶺から下りてしまつたら、下りたような信仰

しか要求できない。信仰は生活が必要とするものなのです。だから隠居して自分を慰めてしまうと、慰めのような信仰しかできない。それ以上のものはその人に必要なのです。喰うか喰われるかというようなところに立ってみると、喰われても後悔しないという信仰がないと生きられない。

こういうふうな寺で仏法の会を開きますが、本当に忙しい人間は寺には来ていないのです。しかしそういう人が本当は必要なのです。かといって、ここにいるあなた方に来るなど言うわけにもいけません。やはり我が身を分に持ちて聞くということが大事なのでしょう。そうすると、それが間接に若い人のためにもなっているかもしれません。年寄りが年寄りであることに全身全霊をかけて聞いていければ、それが無言のうちに若い人のためにもなる。言葉で言ってもだめです。言葉で息子などに教えてもかえって反抗します。息子は息子だ、わしはわしだと、ここに年寄りは立たなくてはいけない。そうすれば若い者の方が、おじいさんの上に不思議力を認めるのではないですか。何か馬鹿にならないものがあるではないか、若い我々の方が負けてしまうようなものがじいさんには光っていると、こういうふうに感ずるものもあるでしょう。ですからそう悲観することもない。

それで、「修多羅真実功德相に依つて一心に帰命する」と言われますが、この「修多羅真実功德」というのは南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏に依つて一心を起すと、その一心の上に南無阿弥陀仏を語る。南無阿弥陀仏において一心を起すと、南無阿弥陀仏が一心の内容になってくる。ですから「帰命尽十方無碍光如来」と言えば南無阿弥陀仏ですけれども、「尽十方不可思議光如来に帰命したてまつる」と言えば信心でしょう。南無阿弥陀仏は名号ですけれども、「阿弥陀仏に南無する」と言えば信心になるのではないか。「阿弥陀仏が南無する」と言えば本願。衆生が「阿弥陀仏に南無する」と言えば信心のことなのです。つまり、南無阿弥陀仏というものに一心を建てると、南無阿弥陀仏全体が一心の内容なのです。一心を述べたことになる。尽十方無碍光如来とは一心の対象を述べたように思ふかもしれないが、そうではない。一心が尽十方無碍光である。一心が南無阿弥陀仏にぶら下がっているのではなく、

南無阿弥陀仏をもつて自分の一心をあらわす。それだからこの一心というものが「廣大」と言われるのです。ここに「彼の世界を觀ずれば辺際なし。究竟して廣大なり」という、その廣大なる一心ということが表されてくるのです。

「彼の世界を觀ずるに」という以下は、尽十方不可思議光如来に帰命した一心が不可思議であり廣大であるということが述べられています。世親菩薩においては、「帰命尽十方無碍光如来」と、無碍ということが中心になる。けれども、曇鸞大師は、重ねて今度は不可思議ということが大事だと言われるわけです。無碍も不可思議も同じようなものです。無碍は、もとをただせば十二光にある。南無阿弥陀仏とは十二光であるというと、あまりにも広すぎてわからないので、世親菩薩がその中から特に無碍と掲げられた。有碍に無碍である。意味をかえせば、宿業の中にがんじがらめでありつつ絶対自由である。つまり必然の中にあつて絶対自由である。必然なしに自由ではない。必然の中において絶対無碍である。こういうものが浄土の生活であり、本願に生きた生活である。こういうことを述べられた。

曇鸞大師は、それにもう一つさらに不可思議ということを加えられた。無碍不可思議と。しかし無碍ということ捨てたわけではない。だから次に「無碍の光明は大慈悲なり」と、やはり無碍を出してあるのです。世親菩薩は無碍、それから曇鸞大師は不可思議。この二つの言い分をもつて、特に努力して南無阿弥陀仏を明らかにされた。こういうことを御開山は、『入出二門偈』で非常に感謝しておられます。

十二光には難思議光もありますが、曇鸞大師が言われるその不可思議というのは、曇鸞大師が直接十二光の難思議から気付かれてそういうことを言われたわけではないでしょう。『浄土論』を見ると、やはり世親菩薩が不可思議ということを書いておられる。世親菩薩は『願生偈』で、『大無量寿経』の中心は浄土というところにあるということに注意された。浄土を明らかにされたということで、「浄土論」というのですが、浄土の内容を三種莊嚴・二種清浄というふうに分らかにされたのです。三種莊嚴功德成就と二種清浄世間。こういう言葉で世親菩薩は浄土を解釈しておられます。解義分を通してみると、その三種莊嚴、国土莊嚴・仏莊嚴・菩薩莊嚴においては国土莊嚴が体なので

す。二種清浄でいうと国土莊嚴は器世間清浄。これは四十八願から出てきたことです。四十八願の内容を整理してみると国土とか仏とか菩薩というようなものが示されている。世親菩薩はその国土莊嚴を器世間清浄と言われる。それから仏莊嚴・菩薩莊嚴を統合して衆生世間清浄と言われます。これを二種清浄と言います。三種莊嚴功德というものが、二種清浄世間に総合して説き示してある。何故そのような必要があるかというところ、やはり国土と衆生ということが大事だからです。世間とは世界です。これは非常に大事なところですよ。

我々は一心を開くと、何か世界を超えてしまうと考えるでしょう。「勝過三界」と言われますから、人間の世界を超えてしまうと考える。しかし、そこは注意しなければならぬところです。人間のこういう考えというのは、やはりキリスト教的であると思います。何か超自然というような概念は、やはりキリスト教に結びつく。人間の世界から超越することを否定するわけではないにしても、その超越という意味は、キリスト教の既成概念で考えるのではなく、やはり仏教独自の考え方で明らかなにしなければならぬ。本来の意味での超越ということはどうか。仏教には豎超・横超ということがあります。つまり超越ということは一つではないのです。普通というような超越は、たいてい豎超である。豎に超えることだけが超越だと思っていて、横に超えるというような超越は普通考えない。ですから、一心の世界を開くという場合も、やはり世界を超越するというふうを考えるけれども、それは無世界という意味ではない。一心を開くと、凡夫の世界が消えてしまうというふうに考えられそうですが、決してそうではない。人間の世界は超えるけれども、そこに同時に、もう一つ新しい世界が生み出されてくるということです。それで二種清浄ということを使うのです。「清浄」という字が加えてありますから、それは普通の世間ではない。世間を破るのですけれども、しかし無責任になってしまうのではない。かえってそこに清浄世間が成り立つ。こういう意味です。この世間ということは、生活という意味なのです。生活する世界を世間と言います。仏教の教えが、もう血になり肉になっっているものだから、今日の日本語では、「世間話では」ということまで世間という概念が日常語になってい

ます。それらはそういう世間なのですけれども、本来仏教の言葉で言うと、清浄世間というのはこれは生活するといふ意味です。だから生活のない観念論的な信仰といふ意味ではなくて、信仰生活といふ意味なのです。それを浄土往生といふのです。ここでないどこかへ行つてしまふといふようなものではない。信仰によつて一つの世界観を生み出してくると、その世界は眺める世界ではない。現実に生きる世界なのです。穢土を無碍に渡る世界です。穢土から逃げ出す世界ではない。穢土をこえて穢土を包むような世界。そういうものを表そうとして二種清浄世間といふことが言われる。

器世間清浄といふその世間とは、一般的な言葉で言えば衆生の生活する場所といふことですが、これは深い意味で言えば境界ではないかと思ひます。『大無量寿経』に「非我境界」とある、その「境界」といふ意味を表すのではないかと思ひます。非常に深い意味で世間とは境界である。仏の境界といふものを賜る。そういう意味があります。それを国土と述べてあるのです。この中に世親菩薩は、「不可思議力を成就したもう」と、不可思議と解釈しておられるのです。これは大事なところですが、国土莊嚴について、特に「不可思議力を成就した」といふことを世親菩薩自身が解釈しておられます。曇鸞大師はこれに感動したのです。ここに曇鸞大師は、何か非常に新しい一つの感銘を受けた。ですから「不可思議」といふことは、曇鸞大師が付け加えたのではないのです。そのもととは世親菩薩にあるのです。世親菩薩が不可思議力を成就すると言われたことに対して、曇鸞大師は特別に新しい感動を得られた。

『歎異抄』の第一条に「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて」とありますが、あの言葉はそこから生まれてきた。『歎異抄』はたいへんなところに起原をもつています。『歎異抄』といふものは後にできたものですが、「誓願不思議にたすけられまいらせて」といふ、あの不思議といふことは世親菩薩から出てゐる。「不可思議力を成就したまう」といふことが、曇鸞大師をくぐつて親鸞まで来た。そして『歎異抄』に来て、あのよゝな言葉になつてゐるのです。

『入出二門偈』では「五つには仏法不思議なり。この中の仏土不思議に、二種の不思議力まします」と言葉で、やぶから棒のように書いてありますが、曇鸞大師は五種の不思議というものに照らして、『浄土論』の「不可思議力」ということを明らかにされた。これはよほど曇鸞大師が感銘を受けておられるのです。五種の不思議ということがいろいろ経典に出ています。特定の経典ではなく、経典の中に随所に示してある。曇鸞大師は学問からいうと、龍樹菩薩の系統の学問をしておられます。龍樹教学を通して世親菩薩の『浄土論』を解釈された。世親菩薩は瑜伽教学で、龍樹菩薩とは教学が違うのですが、曇鸞大師は龍樹教学で世親菩薩の『浄土論』を解釈されたのです。五種の不思議ということも、さがしていけば龍樹の『大智度論』にその根があるかもしれませんが、いずれにしても、五種の不思議というようなことを通して「不思議」ということを解釈されるということからも、曇鸞大師の感動の深さがわかります。

道元禪師に、座禪について述べられた『普勸坐禪儀』という本があります。「原ぬるに夫れ」という言葉から始まるものです。私らは昔、これを全部覚えていたのですけれども、その中に坐禪を勧めたのである。坐禪をして何をするのかというと、ほんやりしているという意味ではない。それは、「兀兀ゴツゴツとして坐定ざじやうして、箇この不思議底を思量せよ」と。「不思議底を思量する。不思議底、如何が思量せん。非思量。これ乃ち坐禪の要術なり。」と書われています。そういう意味で、不可思議ということも、思議されるものと思議するものと二つあっては不可思議は成り立ちません。道元禪師だけでなく、親鸞聖人もそういうことを言われています。親鸞聖人に『自然法爾章』というものがあります。言え、仏法の世界は自然なのです。不自然なことではない。不自然なことというのは、先ほど言ったような、奇蹟みたいな不思議です。それに対してキリスト教で言う不思議は超自然です。仏法の本不思議は、自然ということが不思議なのです。『自然法爾章』に、

無上仏ともうすは、かたちもなくまします。かたちもましますまぬゆえに、自然ともうすなり。かたちまします

としめすときは、無上涅槃とはもうさず。かたちもましまさぬようをしらせんとて、はじめに弥陀仏とぞききならいてせうろう。弥陀仏は、自然のようをしらせんりようなり。この道理をこころえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすということは、なお義のあるべし。

と言われます。阿弥陀仏は、自然ということをしらせるためである、と。自然は無上仏だ。無上仏をしらせんために阿弥陀仏というものがある。「この道理」、自然の道理を心得た後には、この自然のことは常に沙汰すべきものではない。それを沙汰すれば、「義なきを義とす」ということが義になってしまふ。自然を沙汰すれば、不自然になってしまふ。こう言われるのです。道元禪師と同じようなことを言っておられる。

この解釈で一番大事なことは、自然というものは考えるものではないということです。考えたら、不思議も思議になってしまふ。「義なきを義とす」ということは、義がないのを義とする、と考えることではない。考えることなら誰でもできるのです。そうではなくて、「義なきを義とす」ということは、「義なきを義とす」身になることです。「自然を考えること」と、「自然」とは天地の違いがある。自然ということは、自然を考えることではなく、「自然になる」ことです。なるほどこれだ、これが自然です。そうなる。そうなって知ることです。仏教では、これを根本知と言います。本当の知恵です。その根本知に立って初めて、無限に分別できるようになる。自然のはたらきで無限に分別できる。「自然を」考えるのではない。「自然で」考える。それを大慈悲というのです。『入出二門偈』に「無碍の光明は大慈悲なり、この光明すなわち諸仏の智なり」とあるように、智慧というのは仏法にしかない。自然の智慧です。その自然の智慧、自然のままに考えるとというのが大慈悲というものです。

不思議ということもそうです。不思議というものは、仏法においてある。我々が不思議を考えるのではない。我々の浅い知恵で不思議というようになことを考えてみても何にもならないのです。不思議のはたらきで我々を考えなければ

ばならない。不思議のはたらきで私が明らかにされる。だから不思議ということも、本当にただいい加減に聞いておれば、不思議と思議とを別に立てて分別することになってしまう。この点をよく考えてみなければならぬのです。

(本稿は岐阜慈光会主催の『入出二門偈』の会における一九七六年四月十六日午前の講義を筆録整理したものである。文責編集部)